様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：19520306
研究課題名（和文）　湖北省の無形文化財「漢川善書」における聖諭宣講の継承発展に関する総括的調査研究
研究課題名（英文）　The Inclusive Study on the Succession and Evolution of Chinese Hubei District Intangible Cultural Asset “Hanchuan Inviting Good Deed Performing Arts”

研究代表者
阿部泰記（ABE YASUKI）
山口大学・大学院東アジア研究科・教授
研究者番号：40091227

研究成果の概要：
２年間にわたって継続的に行ってきた漢川善書に関する調査をまとめ、漢川善書が地方の演芸として無形文化財に指定されるまでに成長した要件を分析するとともに、国内外の図書館において文献を収集して聖諭宣講の歴史的発展を明らかにした。この過程で歌唱による教化が現代に至るまで各地で行われてきたこと、台湾においても現在無形文化財として唸歌による民衆教育が行われていることも明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1000,000	300,000	1300,000
2008 年度	1200,000	360,000	1560,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2200,000	660,000	2860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：中国文学

１．研究開始当初の背景

(1) 研究は小説と誤認されて注目を浴びた『躋春台』の文体分析を行い、これが聖諭宣講のテキストであることを確認したことから始まった。

(2) これに続いて国内外で『宣講集要』を初めとする宣講のテキストを収集した。

(3) これらの作品の文体を分析すると四川・湖北などの方言である「西南官話」を使用していることを知り、方言文学であることを確認した。

(4) 『中国曲芸志』『中国曲芸音楽集成』四川巻・湖北巻の記録に基づいて現地を調査したところ、四川ではすでに宣講は廃れており、湖北の漢川周辺ではまだ行われていることを知った。

(5) 漢川文化館の協力のもとに漢川周辺を調査して上演の現況を記録した。

(6) その結果、『宣講集要』などと違って、グループを組んで上演し、人物が歌唱を応酬する形式に変え、演劇に題材を求めることによって娯楽的な効果をあげ、聴衆を引きつけて現代に生き残っていると知った。

(7) 一方で歴史文献を収集し、聖諭宣講の歌唱を挿入する文体について考察し、民衆教化には歌唱が必要であったことを礼楽思想をもとに考察した。

２．研究の目的

（１）調査によって漢川善書の上演活動を分析し、『礼記』「楽記篇」や『詩経』「国風序」以来の礼楽思想が長い間の中国文学思想を形成し、現在もなお生きていることを明らかにする。

（2） このような視点に立って、漢川善書が娯楽性と教訓性を共有させることを原則として、先行する小説・戯曲作品を善書の文体に改編し、土地の方言を用いて民衆に親しまれていることを解明する。

（3） 中国では古代から礼と楽は拮抗して社会を調和させると考えられてきた。礼は邪淫を防ぎ、楽は心情を闊達にさせる。清の作家余治による宣講戯曲の創作もこの礼楽理論に基づいている。そして現在湖北省の漢川市で行われている善書の上演形態にもそれが検証できるように考えている。その講釈は語り物の形式であり、人物の歌唱は演劇の形式であるが、テーマは家族倫理・社会道徳を離れることがなく、民衆文芸を限定的に活用しようとする古代以来の礼楽思想が反映している。本研究は漢川善書が聖諭宣講を継承し、文芸に礼楽思想を注入して発展させたことを評価することを目的とする。

３．研究の方法

（１）宣講唱本の整理

漢川市周辺において漢川善書の上演を記録し、その唱本（テキスト）を収集し整理して、語り手の即興的な物語構成力を分析し、文芸としての魅力を考察する。

（２）宣講語彙の整理

漢川善書の用語は当地の方言「西南官話」であるが、これは無学な民衆が聴いて理解する必要があった。『漢語方言大詞典』（1999）、蒋宗福『四川方言詞語考釈』（2000）、『現代漢語大詞典』（2002）を用いながら、テキストの語彙を整理する。

（３）宣講概念の整理

宣講とは４字句、７字句の覚えやすい「聖諭」（皇帝の訓辞）を聴かせることであったが、民衆は耳が慣れて興味を示さなくなり、関連する新奇な果報説話を聴かせることが必要となった。そこで『宣講集要』などの説話集が出現するが、次第に主客転倒して、「宣」は説話の中の人物の歌唱、「講」は説話を講説することを称するようになり、文芸へと発展していく過程を考証する。

（４）善書思想の整理

漢川善書は娯楽的な文学の中に教訓を盛り込んだ文芸である。そこには『詩経』の教化思想と『礼記』の礼楽思想が反映している。漢川善書は小説・戯曲を善書に改編することが行われるが、『珍珠衫』など性欲を肯定する明代の作品などはストーリーを改変している。こうした発想は古代の礼楽思想に基づくものであることを明証する。

（５）善書文体の整理

善書の形式は、ⅰ．神諭形式（『太上感応篇図解』『陰隲文』『覚世真経』など）、ⅱ．童謡形式（『小児歌』『続小児歌』など）、ⅲ．故事形式（『日記故事続集』『循環鑑』など）、ⅳ．宣講形式（『宣講集要』『宣講拾遺』など）、ⅴ．歌唱形式（『勧大嫂』など）、ⅵ．演劇形式（『庶幾堂今楽』『宣講戯文』など）、ⅶ．宝巻形式（『勧世宝巻』など）を取る。漢川善書はⅰ～ⅶすべての影響を受けるとともに、「独白」と「対話」の歌唱の場面を設定してきたことを論じる。

４．研究成果

（１）明清２代の民衆教育政策であった「聖諭宣講」は清代末期に至って変容し、主催者が朝廷主導と民間主導に別れた。「聖諭宣講」に関連する文献を分析して考察し、「聖諭宣講」の中に法律の解説、果報説話の講説、詩歌の朗唱が取り入れられ、宣講が民間主導になるに至って果報説話の登場人物が詩歌を朗唱する文体が発生し、『宣講集要』等の多くの説唱体の果報説話集が誕生したと結論づけた。

（２）毎年文献調査と現地調査の蓄積を進め、さらに新たな文献資料を発見して、「聖諭宣講」が民国以後は近代的な生活知識を授ける講演形式の宣講へと変容し、従来の歌唱形式も消滅したのではなく、各地の民謡・地方劇・歌物語などの歌唱形式による宣講として継承されたと認識するに至ったことを明らかにした。

（３）この研究結果には酒井忠夫『増補中国善書の研究』(2000、国書刊行会）の『宣講集要』紹介や、游子安『勧化金箴―清代勧善書研究』(1999）の余治『庶幾堂今楽』(1860）が演劇形式で果報説話を演じるという社会教育の方法を考案したという指摘から大きな示唆を得た。こうした文芸による社会教育が現代に至るまで継承されていることは、湖北省漢川市における「聖諭宣講」がその証拠である。「聖諭宣講」は近代まで四川省で盛行していたが、現在では湖北省漢川市だけで経常的に上演されていることを明らかにした。

（４）この説唱形式の「聖諭宣講」について、申請者は2002年以来科学研究費を申請し、関係文献を収集してその歴史を解明し、現地調査を行って地域文芸として民衆に親しまれていることを明らかにした。その結果、2006年6月には国家無形文化財に指定され（第一批国家級非物質文化遺産第269号）、同年11月には「2006漢川善書国際学術研究討論会」には申請者は招聘を受けて「善書」の歴史的展開について発表した。

（５）さらに2008年11月には国際学術フォーラム「東アジア伝統芸能の世界」を開催して漢川善書を紹介するとともに、日本においては説唱文学として発達はしなかったが、清代の『六諭衍義大意』の手書が幕府主導で推進されたことを取り上げて日本への善書の影響を紹介するとともに、台湾における善書が唸歌という説唱の形式で行われていることも国宝級芸人楊秀卿・王玉川氏らを招致し、台湾国立大学助理教授林仁昱氏の解説によって明らかにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 阿部泰記、狂言と唸歌における英雄伝説の表現、東アジア研究、７巻、１－１３、2009年、査読無

② 阿部泰記、聖諭宣講の歴史―果報故事の付加―、アジアの歴史と文化、１３巻、１－25、2008 年、査読無

③ 阿部泰記、善書宣講における勧善と娯楽、南腔北調論集、135－154、2008 年、査読無

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）

① 山口大学東アジア国際学術フォーラム実行委員会、２００８山口大学東アジア国際学術フォーラム「東アジア伝統芸能の世界」、１１８頁、２００８年１１月

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者

阿部　泰記（ABE YASUKI）

山口大学・大学院東アジア研究科・教授

研究者番号：４００９１２２７

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし